

はじめに

農業・農家・農村・農協という、いわゆる「農ある世界」を取り巻く危機的状況の打開策を求めて、2016年10月5日から毎週水曜日、一般社団法人農協協会がインターネットで配信しているJ A c o m & 農業協同組合新聞に、「地方の眼力」というタイトルのコラムを執筆しています。

2019年3月27日までのものは、『農ある世界と地方の眼力』（2018年11月）、『農ある世界と地方の眼力2』（2019年12月）として、本書同様、大学教育出版より上梓しました。

本書は、それらに続く第3弾で、2019年4月3日から2020年3月25日までの49編からなっています。編集に当たっては、類型別ではなく掲載順、つまり時系列に並べるスタイルをとりました。

2020年9月16日に幕を下ろした第2次安倍政権のもとでは、公文書などの改ざん、隠蔽、廃棄等々の信じられないことが常態化しました。由々しきことです。少なくとも「農」を巡る出来事については、「あったことを、なかったことにしてはならない」という思いを強く持って執筆しました。その結果、このシリーズの性格は、「農ある世界」を巡る状況についてのウィークリー・クロニクル（週間漫筆集）となりました。当コラムが、あったことを闇に葬らせることなく、後世に残しつづけるという重要な役割を担っていることを、秘かに自負しています。

取り上げた事柄は事実であっても、あくまでも筆者の視角に基づいていますから、「偏り」のあることは否定しません。しかしそれは、「農ある世界」だけではなく、国を巡るあり方が、あまりにも偏って運営されていることを反映したものです。あえて、「堂々と偏っています」と、宣言しておきます。

また、JAグループにおける政権への追従姿勢についても、厳しい言葉でその是正を迫っています。

「JAグループは仲間です。敵対関係にはありません。もう少し言葉を選んでいただきたい」との声も聞こえてきま

す。しかし、言うべきことは、すぐに、そしてはつきりと言わなければ、消極的加担者となります。そもそも言うべき相手は、自分らに都合の悪いことは「聞か猿」を決込むはずですから。

「おぼしきこと言はぬは腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ」執筆してきたわけですが、執筆に際しては、業界紙はもとより地方紙の社説や記事を参考にしています。多くの地方紙では、農業をはじめとする第1次産業が、極めて多様かつ重要な役割を果たしていることを正當に評価した紙面づくりがなされています。これからのような姿勢を堅持し、地域に根差した情報発信に務めていただきたい。

菅政権は、安倍政権の継承を自認しており、すべてにおいて悲観的予想をせざるを得ません。

コロナ禍と相まって、明るい展望の見いだせない状況がしばらく続くでしょうが、その状況を少しでも好転させるためのひとつの希望として、本書が多くの人に受け入れられることを願っています。

内容に関しては原文を尊重し、必要最小限の修正・調整にとどめました。また、個人の所属や肩書き、組織名なども初出時点のままとしています。ご了承ください。

自由に、のびのびと執筆できるコラム「地方の眼力」は私のライフワークです。恐らく他にはないであろう、すばらしい「場」を提供していただいている、一般社団法人農協協会には、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

また、本当に厳しい出版事情の中、快く出版の機会をご提供いただいた株式会社大学教育出版の佐藤守社長にも御礼申し上げます。

最後になりましたが、今年4月30日に亡くなった実母山下フサ子（享年92）の墓前に本書を捧げます。

2020年9月

小松泰信

農ある世界と地方の眼力3
——令和漫筆集——

目次

はじめに	i
------------	---

令和とオスプレイ	(2019・04・03)	3
----------------	--------------------	---

正面から切り込み、乱痴気騒ぎに警鐘／国民主権にそぐわぬ元号の在り方／政府が時をも支配するのか／「国書」強調への違和感／象徴天皇制そのものの将来を考えよ／オスプレイ緊急着陸は令和の未来を暗示する

紙幣刷新より疲弊刷新	(2019・04・10)	7
------------------	--------------------	---

「総保守」堅調／赤の他人のアドバイス／選挙結果以前の深刻な問題／女性の政治参画の道を拓け／紙幣刷新がそれほど慶事か

水産物禁輸敗訴と風評被害	(2019・04・17)	11
--------------------	--------------------	----

水産物禁輸敗訴が突き付けたもの／現場でできるのは安全安心の地道な積み重ね／原発が置かれた現実を直視せよ／密閉度高き段ボール群が教える根絶されない風評

野党共闘ってマジすか	(2019・04・24)	15
------------------	--------------------	----

なりふり構わぬ自民党。大ウソ警報発令！／「国家ビジョン」が求められる野党／野党に期待を寄せる地方紙／野党共闘の難しさと覚悟

どうする道厚生連個人情報漏えい事件	(2019・05・08)	19
-------------------------	--------------------	----

暗雲垂れ込めるJAGグループ北海道／個人情報扱ふ意識の低さ／他人事然とした顔と顔にも問題あり／日本農業新聞はなぜ沈黙するのか

公約は耳に優し……………	(2019・05・15) ……	23
大学無償化法というまやかし／「出す出す詐欺」の官邸農政に農業後継者を育てる気はない／武闘派から舞踏派への変心／暴力とハネムーン		
大義を大儀がらずに考える……………	(2019・05・22) ……	27
付ける薬のない議員にはマニュアルの効果なし／大学の在り方も歪める「大学無償化法」／地方議会の危機と打開策／議会が遠ざかる旧村／興味深い「穏健な多党制」／今だからこそ考える		
不労会談……………	(2019・05・29) ……	32
求められるストック重視／フロー重視の日米首脳会談／沖縄タイムスと中国新聞は訴える		
いろいろな暮しがあるんです……………	(2019・06・05) ……	36
素人の投資は老後破産をもたらす／農業への道しるべ／やはり期待を抱かせる地域おこし協力隊／W W O O F (ウーフ)、これも国際的関係人口づくりの一つのあり方／文化的ストックの保存会を保存し続けるために／大事にすべき心や肉体を通った言葉		
嘘つきの、抱きつき、泣きつき、運の尽き……………	(2019・06・12) ……	40
妊婦加算が再開されれば国難は突破できず／ファンドの資格なきA・F・V・E／JAグループは官邸農政を支持!?／すごさの見せどころを誤るな		
どこまで続く出鱈目ゾ……………	(2019・06・19) ……	44
コラムのネタには困りません／やはり隠蔽。でも驚きません／特区ブローカーの正体／スクープのきつかけ		

バカは投票に行かないんだって……………(2019・06・26)……………

森が泣いている／豪雨の土砂を用いた「水田再生プロジェクト」／わが物顔のオスプレイ／長野県内世論調査結果と一票を投じる意味

「アベ党」でよろしいんですかね……………(2019・07・03)……………

「安倍農政」6年半で、農業生産の基盤弱体化は止まらず／支持せず、評価せずとも、「アベ党」ですか／恫喝に買収!? JAGグループは大丈夫ですか／政権交代でくらしの危機を突破せよ

「食料自給率」と「国民の理解」……………(2019・07・10)……………

自然の額縁／JAGグループは「食料自給率の向上」を放棄するのか／誰と、何を、戦うつもりですか／エールと私怨

あなたは戦争への一票を投じますか……………(2019・07・17)……………

清志郎の遺した言葉が甦る／国益重んじ旗幟^{きし}を鮮明にせよ、と訴える産経新聞／冷静な対応を求める地方紙／「自衛隊員の命を差し出すか、農業を差し出すか」最後に出てきた選挙の争点／戦争に加担する農業協同組合はいらない

民意、見えるか、聞こえるか……………(2019・07・24)……………

痛快なり、信濃毎日新聞／ここに民意あり／ヤジる者は許しません! でも、ヤジるのは好きなんだよな、ってか?／これも農業・JA関係者の民意ですよ

当事者の苦悩に思いを馳せよ……………	(2019・07・31)……………	68
頼りにならない代弁者たちとMMT（現代貨幣理論）に裏付けられた経済政策／「れいわ」の農政と発火点／豚コレラをどうする！		
笑いたいけど笑えない……………	(2019・08・07)……………	72
笑いたいのは山々ですが／問題山積の農業政策。心配の種、三連発／笑わせてくれるよ安倍首相		
モラルハザード 国家の醜態……………	(2019・08・21)……………	76
尊い命を奪っている／政権の飼い犬「大阪地検特捜部」／出番ですよ、佐川さん／お元気ですか、昭恵さん／本当に切ないね		
売られゆく我が国の胃袋……………	(2019・08・28)……………	80
過去最低の食料自給率／ウインウインだって？ 勝ったのは誰だ？／政府の姿勢を追及する地方紙／ツマジロクサヨトウまで駆り出す茶番		
だれがサイレントマジョリティやねん……………	(2019・09・04)……………	84
やじを飛ばせば、もれなくデカが飛んでくる／警察やりすぎ、政権やらせすぎ／「夏休み」は終わってますけど		
紳士協定の重さ……………	(2019・09・11)……………	88
一国依存リスクが顕在化する対馬／R（カジノを含む統合型リゾート施設）誘致にもご執心／「長崎新幹線」の迷走／「イシキ」の叫び、再び		

とんだ妄言キタムラダイジン……………	(2019・09・18)……………	92
<p>何がボランティア精神ですか／「石木ダム強制収用を許さない議員連盟」の設立と「どぎゃんか集会」／住民を犠牲にした水を飲みたくはない／正論を展開する長崎新聞／妄言大臣は去りゆくのみ</p>		
非清浄国化を恐れる非正常国……………	(2019・09・25)……………	96
<p>それでも遅いワクチン接種／後門の狼、アフリカ豚コレラ接近中／及び腰のワクチン接種／非清浄国化を恐れて養豚産業滅ぼす／「魂の叫び」と「空っぽの言葉」</p>		
マッチポンプにご用心……………	(2019・10・02)……………	100
<p>ゾーゼーの悲劇／寄り添われても迷惑。臭いから／一般社団法人全国農業協同組合中央会は政権の傀儡<small>かいらい</small>と化するか／畜産業への影響と米国との関係</p>		
評価できないものに尻尾は振るな……………	(2019・10・09)……………	104
<p>「記憶にない」とは言わせない／評価できない安倍農政／野党に注文を付ける前に、眼前の身内にこそ注文を付けよ／ランプ氏を嘘つきにしているの</p>		
大災害時代を生きてやる……………	(2019・10・16)……………	109
<p>家無き人と思慮無き人／危機感あふれる地方紙／大災害時代のまっただ中</p>		
憲法第25条を蹂躪するなかれ……………	(2019・10・23)……………	113
<p>取り戻せ「水の自治」と「水の文化」／進ませなくてはならぬ水道民営化／またまた空から降ってきた／放射性物質の除染は被害者がすべきなの!?</p>		

受験生をもてあそぶな……………	(2019・10・30) ……	117
「身の丈」発言の概要／破綻している英語民間試験／受験生を受難者とするなかれ／受験生を苦しめて、何を得るのか		
森や樹木を怒らせるな……………	(2019・11・06) ……	121
ダムが造れたら、それでよかとね!?／決して追い風ではない／森林政策は防災政策／納得できない森林環境譲与税の配分		
石木ダム建設はおやめなさい……………	(2019・11・13) ……	125
知事！ あなたの裁量でダム建設は止められるそうです／岩見県土木部長！ イヤミじゃないけど「グリーンインフラ」をご存じですか／農協は自民党で、推進派。いっちゃん好かん		
自治から始める……………	(2019・11・20) ……	129
「大切な県民」とは笑止千万／「平成の大合併」がもたらした「心の空洞化」／「圏域」構想への危惧／売国・亡国の2887日		
「通識」と「常識」……………	(2019・11・27) ……	134
「通識」教育の成果が問われる／安倍族に「常識」教育を／河北新報が問いかけるJAの政治姿勢／JA全中に「代表機能」は担えない		

反社会的安倍政権を許さない.....(2019・12・04).....

身内でも意見が違えば冷遇／破綻する農業成長戦略／主要農作物種子法の轍を踏むな／散らめなら散らせてみせよう安倍桜

埋没しない、させない、諦めない.....(2019・12・11).....

涙の訴え、駄馬の耳に念仏／石木ダムは科学的に見れば本当にいらぬダム／埋没費用に埋没するな／反社政権と埋没するのはまっぴらごめんなすって

How dare you!.....(2019・12・18).....

石炭火力発電所の新設ですか／強シンゾウか狂シンゾウか安倍晋三／共同通信世論調査結果の要点／世論調査結果が教える、慣れのゆきさき

地方創生をけがすサクラとーR.....(2019・12・25).....

「アーキビスト」の養成よりも安倍族の消去を要請する／地方にも舞い散るサクラ／ーRは地方を早世させても創生はさせない／「ささやかな意思表示」を積み重ねる

小さな幸せを守り抜く.....(2020・01・08).....

人口減少問題は平成の積み残した課題／政府の責任を問う高知新聞／長期的視点が不可欠な移住から定住／田園回帰を喜ぶたいが喜べない

未来を変える……………	(2020・01・15) ……	158
-------------	-----------------	-----

アホウ副総理のアホウ言2連発／全否定される現政権の方針。しかし変わらぬ岩盤支持／社会はきつと変えられる／「新農本主義」への期待と警戒心

嘘つきは地方創生を語るな……………	(2020・01・22) ……	162
-------------------	-----------------	-----

「農業の危機は国土の危機」なんです／地域おこし協力隊の定住状況／ミスマッチと解消策／地域に溶け込む「よそ者」／地方創生に泥水を差す首相

ヤジにも空疎な言葉にも「農」を貫け……………	(2020・01・29) ……	166
------------------------	-----------------	-----

多様性を認め合え／防災における基本的人権／ジェンダー不平等社会に風穴を開ける／中身はないが空疎ではない？

「ふるさと納税制度」を汚したのは誰だ……………	(2020・02・05) ……	170
-------------------------	-----------------	-----

総務省に厳しい地方紙／泉佐野市に厳しい全国紙／泉佐野市は法を犯したのか

「結論ありき」を支える「非科学的架空予測」……………	(2020・02・12) ……	174
----------------------------	-----------------	-----

究極の適材大臣／既成事実が積み上げられる石木ダム問題／本当に水源は不足しているのか／科学的反論なき答申は無効

日本経済まで沈没させる気か……………	(2020・02・19) ……	178
--------------------	-----------------	-----

GDP 年6・3%減 経済「危険水域」に／緩やかに沈みつたある／悲観的にならざるを得ない地方経済／もうお前は詰んでいる

コロナが見せる風景…………… (2020・02・26) …… 182

洋七師匠、GAPと東京オリ・パラを斬る／勉強して、「踊るあほ」役人で人生を終えるのですか／コロナ拡大よりキャンセル料が怖いタロウ

アベ地獄…………… (2020・03・04) …… 186

子分たちにも伝わらない「思い」って何／東京事変、自粛大変／ハナはどうなる、ミルクはどうする／やはり不備ですさんな「一律休校」

アベに刃物は持たせるな…………… (2020・03・11) …… 190

なぜか岡山二段重ね／緊急事態宣言は劇薬／「本音のコラム」3連発／「伝家の宝刀」を持たせていいのか。アベだぜ！アベ、ヤベエ！

コロナウイルスとアベノウイルス…………… (2020・03・18) …… 194

北海道新聞の叫び。福島民友新聞の憂慮／トヨタといえども新型コロナに便乗するな／ソニタクまみれの対策は後手で愚手／先に逝くのはアベノウイルス

「農政」にあなたの嘘は通じない…………… (2020・03・25) …… 198

「食料自給率の向上」を捨てた自民党／安倍農政を糺す^たしんぶん赤旗と信濃毎日新聞／興味深い3月24日付の日本農業新聞

農ある世界と地方の眼力3

—— 令和漫筆集 ——

令和とオスプレイ

(2019・04・03)

新元号をうれし気に掲げる、菅義偉ヒトの話は聞かん坊長官の顔と、付け焼刃談話で政治利用を目論む安倍晋三首相の顔。小面憎いふたつの顔につきまとわれる令和の未来は推して知るべし。当コラム、発表の瞬間からテレビを通じた関連報道に目を背けている。

正面から切り込み、乱痴気騒ぎに警鐘

「国民の存在はどこにある」と題して鋭く、深く切り込むのは信濃毎日新聞（4月2日付）の社説。

まずは元号を「独自の文化」と位置付け、「天皇制と不可分の存在」とし、「現在は日本国憲法による象徴天皇制の時代だ。天皇は日本国民の総意に基づく存在である。それなのに今回の改元手続きは国民主権とは懸け離れている」と、問題提起。具体例として、新元号の候補名が政府首脳以外に初めて公開されたのが発表当日の有識者の懇談会で、かつ30分程度であったことを紹介し、「国民の声を聴いたという形を残したにすぎない」とする。

つぎに、前例踏襲といいながら前例なき記者会見で「一人一人の日本人が、明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる。そうした日本でありたい、との願いを込めた」と安倍氏が述べたことに対して、「だれの思いなのか。元号は首相の私物ではあるまい。『令和』を自らの国民へのメッセージとするのなら筋違いではないか」と指摘し、会見自体が「政治利用」であることをも示唆している。

さらに、一連の手法に固執する背景に、「日本会議」や連携する自民党保守派の存在を指摘し、「保守派に配慮して秘密主義で進めた元号選考には、政府への求心力を高める思惑もうかがえる」とは、お見通し。

最後に、「人口の減少や年金問題、経済政策の行き詰まりなど、日本が直面する課題は山積したままだ。新元号ブームにあおられて、目を曇らせてはなるまい」と、乱痴気騒ぎに警鐘を鳴らす。

国民主権にそぐわぬ元号の在り方

神戸新聞（4月2日付）の社説も、国民主権の下で「元号はどれほど国民のものとなったのか」と、疑問を呈する。「国民は何も知らされず、待たされ続けた。私たちもつい『元号は上が決めるもの』と思うがちだ。それでは政府の決定を国民は押し頂くだけになる。もともとは元号は天皇の「御代（みよ）」を表す。だがその考え方は憲法の理念である国民主権にそぐわない。国民が自分たちのものと思えるような元号の決め方、在り方を模索する必要があるだろう」とする。

「上から押し付けるのは健全ではない」、前回の改元時も「新元号が空から降ってきたような違和感があった」とは、天皇制の歴史に詳しい本郷和人東大教授のコメント。「秘密主義は元号と国民との距離を遠くするだけである」と締める。

岩手日報（4月2日付）の論説も、「元号に関しては、国民主権の観点からさまざま意見があるのも事実。……国民生活に深く関わる元号の選定過程を当の国民につまびらかにするのも『時代』の要請」とする。

政府が時をも支配するのか

福井新聞（4月2日付）の論説は、首相が「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められている」と述べたことに対して、「出典を精査しない限り、そう読み解くのは難しい。政府はそのためにも選考過程を分かりやすく説明する必要がある。世界で唯一、元号制度が残る国だからこそ、意義を捉え直すきっかけにしなければならぬ」とする。さらに、「元号は『皇帝が時をも支配する』との考えに基づく。日本でも長年、天皇が定め、その権威を高めてきた歴史がある。政府がそうした視点をいまだに持ち続けているとしたら問題だろう」と、急所を突く。

「国書」強調への違和感

「首相は、日本礼賛的アピールに力が入っていないか」とは新潟日報（4月2日付）の社説。「日本のリーダーとして自国の文化や伝統への誇りを訴えたのだろうが、違和感も禁じ得ない」とする。歴史的に見れば、日本は他国の文化や文物を積極的に吸収することで、自国の文化的な幅を広げてきた。漢字など中国文化の影響も強く受けている。国境を越えた人々の交流が、万葉集など日本文化のベースとなったことは間違いない。国際交流や友好親善は、平和の基礎ともなるものだ。平和な日々への感謝や新たな時代について語るなら、それらの事柄への言及があってもよかったのではないかと、たしなめる。

象徴天皇制そのものの将来を考えよ

「大きな世替わりを経験するたびに、中国の年号を使用したり、明治の元号を使ったり、西暦を採用したり、目まぐるしく変わった」経験から、沖縄タイムス（4月2日付）の社説は、「歴史の流れをつかむことが難しく、同時代の世界史の動きと比較する視点を持ちにくいなど、マイナス面も多い。元号を強制することがないよう求めたい」とする。そして、「『天皇退位による改元』は、憲法と元号の関係、象徴天皇制と民主主義の関係、象徴天皇制そのものの将来を考える機会でもある」と、本質的な問題を提起する。

オスプレイ緊急着陸は令和の未来を暗示する

2日の朝、我が家に届けられた毎日新聞（大阪版）の一面。新元号を伝える記事の横に、「オスプレイ伊丹緊急着陸」の記事が載っている。1日午後1時55分ごろ、米軍普天間飛行場所属のオスプレイが大阪（伊丹）空港に緊急着陸。同機は直前に緊急事態を宣言していたそうだ。米軍は「パイロットがコックピット内の警告灯の点灯を確認したため」と説明している。

乱痴気騒ぎに多くの紙面を割く社会面には、「速やかな情報提供がなされなかったことは非常に遺憾」（伊丹市長）、「伊丹空港にオスプレイがあることに驚いた。気付いた時には、まだプロペラが回っていたが、うるさかった」（展望台から見ていた人）、「近くに自衛隊の駐屯地があるのに、なぜ伊丹空港に降りなければならなかったのか。オスプレイの事故の報道を耳にするので怖い」（緊急着陸を知り、空港に駆け付けた人）、といったコメントが紹介されている。

岩屋毅防衛大臣はアメリカ側に対し、安全管理の徹底を申し入れたそうだが、北朝鮮のミサイル問題で国難解散まで行ったバカ殿は慶祝ムードに酔いしれていたようだ。しかしこのオスプレイ、御代変わりだ、新元号だ、国民主権な

どと、属国の分際で騒いでいる者どもへの、令和の未来を暗示する宗主国からのギフトとして見ると、あんな暗澹たる気持ち
を禁じえない。

「地方の眼力」なめんなよ

紙幣刷新より疲弊刷新

(2019・04・10)

「国政選挙も近づく。安倍政権は『1強』をかさに農協改革やTPPを押し通してきた。荒れ放題になっている田畑の草取りを本気で考えた方がいいかもしれない」とは、日本農業新聞(4月9日付)のコラム「四季」。

「総保守」堅調

統一地方選挙前半戦が終わった。自民党の堅調な戦いぶりを評価する読売新聞(4月8日付)の社説は、唯一与野党対決となった北海道知事選において、自公推薦の新人が野党統一候補を大差で破ったことを、「自民党が農業団体や経済界の支援を得て、組織力を生かした選挙を展開したことが奏功した」と分析する。さらに、「労働組合など野党の支持層が比較的厚い北海道で敗北」したことから、野党共闘体制の立て直しの必要性を示唆する。農業団体とは、JAグループのはず。これじゃ荒れ放題に拍車がかかる。

毎日新聞（4月9日付）の社説も、「自民は堅調」とする。そして、大阪維新の会も、「憲法改正など政策全般をみれば安倍政権に近い」とし、「大阪も含め『総保守』の堅調ぶりが目立ったのが統一選前半戦の結果だ」と総括する。ただし、「自民党が堅調なのは野党の弱さに支えられているからだろう」として、『反安倍』の旗を掲げるだけで地方選は戦えないことははっきりしている」「自民党のスキャンダルを追及する空中戦に頼るばかりではなく、総保守に対抗する政策と人材の蓄積に地道に取り組む必要がある」とは、頂門の一針。

赤の他人のアドバイス

産経新聞（4月9日付）の主張も、「夏の参院選で実働部隊となる地方議会に限ってみれば、自民党はひとまず、基盤強化に成功したといえよう」と評価しつつ、「安倍1強」にあぐらをかく自民党の慢心を戒める。その一例が、大阪府知事・大阪市長選で自民推薦候補が大阪維新の会に敗れたこと。

『『大阪都構想』への支持以上に、しらけた有権者が自民党の体たらくにノーを突き付けたのではないか。理念も政策も違う与野党がなりふり構わず共闘する姿は、滑稽を通り越し醜悪だ。有権者を愚弄しているとみられても仕方あるまい』との見立ては、愛するが故の厳しさか。共産党との共闘が特に気に障ったようで、共産党に対しても、「無党派や保守層への浸透を図る戦術に傾くあまり、『唯一の野党』を掲げていた、かつての面影が失せつつあるのが退潮の一因だろう』とのこと。赤の他人の鋭きアドバイス。

選挙結果以前の深刻な問題

朝日新聞（4月9日付）の社説は、道府県議選の平均投票率が44・08%と戦後最低、かつ41道府県のうち33道府県が最低を更新したことから、「国でも地方でも、有権者が関心を寄せなければ、政治や行政の規律はゆるむ」として、「政治に緊張をもたらすのは、厳しく監視する有権者の一票の積み重ねにほかならない」ことを強調する。

地方紙の多くが同紙以上に、低投票率や無投票選挙区の増加という、選挙結果以前の問題を深刻に受け止めている。

デーリー東北（4月8日付）の社説は、県政与党の肥大化による監視機能の低下を危惧する。議員に対して、「是々非々と判断しているか、立ち止まって考えてほしい。問題の本質がどこにあるか、思考停止に陥ってはいないだろうか。議員は党人や会派の一員である前に、まず一人の議員であるべきだ」と、訴える。さらに、「住民と十分に対話もできているか」と問いかける。なぜなら、「早大マニフェスト研究所の2018年度議会改革度ランキングでは、青森県議会が全国の都道府県でワースト3。特に住民参加の分野では最下位だった」からである。

翌9日付の同紙社説は、無投票選挙区解消策として、議員報酬の引き上げや定数削減の前に「魅力ある議会づくり」が先決とする。また大きな進展が見られない「地方創生」と、地方に波及しない「アベノミクス効果」が作り出す「あきらめムード」を低投票率の主因とし、「議会の活性化を図り、有権者に興味を持つってもらう方策について知恵を絞らなければならぬ」と、説く。

南日本新聞（4月9日付）の社説は、「拍車がかかる過疎・高齢化の問題など、地方が直面する課題は山積している。にもかかわらず、有権者の6割近くが棄権した現実には極めて重い。住民との距離が広がったままでは、地方自治は成り立たない。自治の根幹を揺るがす重要なテーマとして受け止めるべきだ」と危機感を募らせ、「若い世代に選挙の重要性を伝える啓発活動」を提起する。

秋田魁新報（4月9日付）の社説も、「急速に進む人口減と少子高齢化にいかに臨むかは、喫緊の課題である。さら

に今回は、政府が秋田市の陸上自衛隊新屋演習場に配備を計画している迎撃ミサイルシステム『イージス・アシヨア』（地上イージス）にどう対応するのが問われた。これほど重要な問題が山積しているにもかかわらず、盛り上がりや欠いたのは深刻」とする。事態克服のため、県議会には、「いかに県民との『距離』を縮め、本県に必要な政策を実現できるかが問われている」と発破をかけ、有権者には、「県議一人一人の活動を注視」せよと、力説する。

さらに高知新聞（4月8日付）の社説も、「選挙権年齢が『18歳以上』となつてから初の県議選。にもかかわらず有権者の5割余りがそっぽを向く、というのは危機的な状況だ。代議制民主主義の存立基盤が揺らいでいることを改めて示している」と、切実な状況を示す。無投票選挙区が過去最多タイの5区に及んだことについても、「まともな選挙ができにくいほど、地方の疲弊がまた一段と進んだということではないか」と分析する。

女性の政治参画の道を拓け

山陽新聞（4月9日付）の社説は、女性の政治参画に向けた政党の努力を求めている。岡山県議選では、女性の立候補者8人全員が当選し女性議員の数は過去最多、女性の割合も14.5%と過去最高を更新した。しかし、道府県議選での当選者のうち女性は全体の10.4%であることから、2018年5月施行の「政治分野の男女共同参画推進法」がめざす「均等」への道のりは遠いとする。候補者や議席に占める女性割合を定めるクオータ制の導入の必要性を説くとともに、地方議員らでつくる「出産議員ネットワーク」が2018年10月に「育児関連の休暇規定の整備を各地方議会団体に要請した」ことを紹介している。

紙幣刷新がそれほど慶事か

元号で空騒ぎを演出したかと思えば今度は紙幣刷新とのこと。狙いは、統一地方選挙後半戦の勝利か、支持率向上か、はたまた参院選か。ブラック広告代理店のシナリオ通りに、メディアも上機嫌の国民だけを映し出し、「浮かれにヤソソソ」のムードづくりに精を出す。刷新理由の一つが偽造防止とのことだが、偽造捏造政権の一翼を担う、頭カルロス・ゴーマン・麻生氏による発表とくれば新紙幣を飾るお三方も迷惑千万のハズ。刷新すべきは、現政権と地方の疲弊。

「地方の眼力」なめんなよ

水産物禁輸敗訴と風評被害

(2019・04・17)

桜田義孝前五輪担当相が復興を巡る失言で更迭された直後の4月14日、安倍晋三首相は、東日本大震災からの復興状況を確認するため福島県を訪問した。東京電力福島第1原発を視察し、「閣僚全員が復興相との基本方針をもう一度胸に刻み、政府一丸で復興に全力を尽くす」と記者団に強調したようだ。2013年9月以来、5年7カ月ぶりの訪問と聞けば、間違いなく「口だけ殊勝」。

水産物禁輸敗訴が突き付けたもの

「東日本大震災から8年を経た今も、韓国など23の国と地域が輸入規制を続けている。安全性への不安が、国際社会に根強く横たわっていることを示す」（神戸新聞・社説、4月13日）のは、世界貿易機関（WTO）の紛争を処理する上級委員会が4月11日（日本時間12日未明）に下した結論である。すなわち、韓国が東京電力福島第1原発事故後に福島など8県産の水産物の輸入を全面禁止しているのは、WTO協定のルールに違反する、とした1審の判断を破棄し、日本が逆転敗訴したことがある

毎日新聞（4月13日付）は、「韓国は禁輸を継続する方針。日本は、WTOの判断をテコに輸入制限を続ける国々に解除を働き掛け農水産物の輸出拡大を目指す戦略を描いてきたが、大きな逆風となりそうだ」と、伝えている。

さらに関係者が発した、つぎのようなコメントを紹介している。

河野太郎外相は「主張が認められなかったことは誠に遺憾だ」「韓国に対して規制全廃を求める立場に変わりはない」と、2国間協議を呼び掛ける考えを示した。菅義偉官房長官は「日本産食品は科学的に安全との1審の事実認定が維持されている」「敗訴したとの指摘は当たらない」と、記者会見で語った。吉川貴盛農相も「日本の食品の安全性を否定したものではない」と強調した。

もちろん韓国外務省は「現行輸入規制措置は維持され、日本の8県全ての水産物に対する輸入禁止措置は継続される」との政府見解を発表した。

現場でできるのは安全安心の地道な積み重ね

福島民報（4月13日付）の論説は、「原発事故の負のイメージが残る本県にとって大変残念だ」としたうえで、「今回の判断が規制緩和に傾きつつあった他国の方針に影響を与えることも心配だ。それでも県産品の輸出は増加傾向にある。国によって受け入れが拡大しているのは確かだ。産品の安心の質を高め、着実に実績を積み重ねる必要がある」と気丈に語りつつも、「国際貿易の紛争処理での今回のような判断は、被災地にとって原発事故という負の遺産の大きさを改めて突き付けられたように感じる」と、落胆の色は隠せない。さらに、「最近では県が風評払拭のために作成し、インターネットで公開した県産日本酒のPR動画に、誤解や偏見に基づいて中傷する文章が英語で書き込まれ、県が書き込み機能を停止する出来事もあった」ことを伝える。

「どれほど努力を重ねても、一度付いてしまったイメージは簡単に拭えるものではない。東京電力も国も賠償に値する被害が継続していることを強く認識するべきだ」としたうえで、「安全と安心の地道な積み重ねが規制解除を早めてくれるはず」とする。

原発が置かれた現実を直視せよ

その地道な積み重ねを、水泡に帰させるような動きに警告を発する社説も少なくない。

信濃毎日新聞（4月13日付）は、「福島第1原発には、今も汚染水がたまり続けている。放射性物質の影響への懸念は、国内においても完全に解消されたわけではない。情報公開を徹底し、処分方法の検討を十分な納得を得ながら進めることは、国内外を問わず世論の理解を得る大前提である」とする。

さらに同紙は16日付の社説においても、「東京電力が、廃炉作業中の福島第1原発3号機の使用済み核燃料プールか

ら、燃料の搬出を始めた」ことを取り上げ、「原発という施設が、原子炉に限らず使用済み核燃料という大きなリスクを抱えている事実を、この機会に再認識しておきたい」とし、「政策を転換し、核燃料の安全管理と廃棄物としての処分に道筋を付ける必要がある」とする。そして、「安倍晋三首相は第1原発と周辺を視察し、『復興が進む福島』の姿を世界に発信したい」と述べている。『復興五輪』のPRに前のめりになるより、原発が置かれた現実を直視すべき」と、直言する。

愛媛新聞（4月16日付）の社説は、「福島原発では今も人体に有害な汚染水がたまり続け、その処理方法が課題となっている。増え続けるタンクの置き場所がなくなるとして、国は汚染水を水で薄めて海に流す方法を議論しているが、新たな風評被害を招く懸念が拭えない。海への放流が国民や輸入規制している海外の理解が得られるのか、あらゆる角度から議論を重ね、処理方法の合意形成を慎重に図らなければならない」とする。

京都新聞（4月13日付）の社説も、「各国の輸入規制が長引けば、それが風評となつて日本国内での流通にも影響が出かねない。このことも十分考慮しておくべきだ。禁輸の起因になつた福島第1原発では、タンクで保管を続けている汚染水を浄化処理して海洋放出する案が取りざたされている。新たな風評を招く恐れがある」として、「処理方法の妥当性を見極めると同時に、徹底した対策が必要」とする。

密閉度高き段ボール群が教える根絶されない風評

中国新聞（4月14日付）の社説は、「東電も政府も、深刻な被害が8年たった今も続いていることをしっかりと認識するべきだ。……日本も振り返って反省すべき点はある。福島など被災地の農水産物が敬遠されるケースはまだ多いという。外国に禁輸の解除を求めるなら、まず国内の風評から払拭していくのが筋だ」との正論。

産経新聞（4月13日付）の主張も、「外国に禁輸撤廃を求める以上、国内での風評対策をさらに強化すべき」とする。

この問題、水産業に限った話ではない。2018年11月下旬に訪れた北海道の大規模野菜産地の集出荷施設。積み上げられた段ボール群の中に、他とは異なる仕様の一団が目についた。持ち運びのための指を入れるところが開けられていない、密閉度の高いもの。担当者によれば、その取引先は日本海側の鉄路による輸送を希望。それを断ると、可能限り外気に触れない仕様をもとめてきたとのこと。その理由はお分かりであろう。放射能から野菜を守るためである。

日本農業新聞（4月14日付）によれば、2018年に開かれた東京都食育フェアで、地産地消運動促進ふくしま協同組合協議会が、会場を訪れた消費者300人を対象に行ったアンケート調査で、福島県産米の全量・全袋検査を「続けるべき」とする回答が、前年の調査から6・4ポイント減の50%であったとのこと。この動きを楽観的にみるべきではないことを、件の段ボールが教えている。

風評被害を根絶するためには、「続けるべき」がゼロになっても全量・全袋検査を止めないこと。

原発の、東電の、政府の、犯した大罪を糾弾し、この悲惨な出来事を風化させないためにも。

「地方の眼力」なめんなよ

野党共闘ってマジすか

(2019・04・24)

4月20日、安倍晋三首相は、衆院大阪12区補選の自民党公認候補を応援するために大阪入り。籠池夫妻に睨まれながらの演説。終えて向かった先は、大阪・なんばグランド花月。吉本新喜劇に飛び入り出演。場所が場所だけに、飛んで火に入る笑い者。

近々立ち上がる農福連携を推進するための官邸会議の有識者メンバーに、城島茂氏（TOKIOのリーダー）が選ばれる

ことを 日テレNEWS24（4月23日18時2分）が伝えている。人気テレビ番組での農業への取り組みが選出理由のようである。取り込めるものは何でも取り込んでいく魂胆見え見え。

なりふり構わぬ自民党。大ウソ警報発令！

日本農業新聞（4月20日付）は、自民党が夏の参院選に向け、農業票固めに本格的に動き出したことを伝えている。ひとつは、首相が「前回参院選で負け越した東北など地方区の1人区対策として農家向け政策パンフレット作成を岸田文雄政調会長に指示」したこと。「首相自ら農家向けパンフレット作成を指示するのは異例。関心の高い米政策などを重点的に盛り込み、5月の大型連休明けにも農業地帯に配布してアピールする」そうだ。もうひとつは、18日夜に二階俊博幹事長の仲介で、JA全中の中家徹会長と会談・会食し、選挙での支援を要請したこと。そこには、二階幹事長や森山裕国会対策委員長らも同席したそうだ。

中家会長と太すぎるパイプを持つ二階氏は、JAグループから長澤豊全農会長、金原壽秀全中副会長らを同行させ、24日から29日まで安倍晋三首相の特使として、中国を訪問する。

毎日新聞（4月24日付）は、この訪中を二階氏の「失地回復」と参院選への側面支援の目論みとして伝えている。

失地とは、自派の桜田義孝前五輪担当相辞任や衆院補選敗北などによって失われつつある党内での求心力。

参院選への側面支援とは、18日に練り広げられた銀座の夜の物語に加えての、JAグループ幹部の外遊への誘いによる「農業票」の取り込み。県知事が参加する山梨、滋賀、高知の三県も、参院選の勝敗を左右する1人区。「外遊に連れて行くのは二階氏流の人心掌握術だ」（自民党関係者）そうだ。心だけではなく、急所までも握られたかどうか見さ

せていただきますよう。

「国家ビジョン」が求められる野党

「昨今のわが政界は、『緩む』政権と『おごる』野党との、なんとも情けない『争い』と堕している。困ったものである」で始まるのは、小林吉弥氏（政治評論家）による日本農業新聞（4月14日付）の「連載永田町ズバリ核心」。「緩む」政権の象徴が、「忖度」発言の塚田一郎前国土交通副大臣と、一議員への応援を「復興」以上に位置付けた桜田義孝前五輪担当相。「おごる」野党を示したのが、統一地方選前半戦において「結局は党利党略、主導権争いが横たわり、参院選へ向けての地ならしとしての野党『共闘』は、片鱗すらうかがえなかった」こと。

政治部野党担当キャップの「参院選の勝敗を左右する32選挙区の1人区の統一候補も、現状では愛媛、熊本、沖縄の3選挙区しか決まっていない。与党候補はすでに全力投球なのに、もはや出遅れ状態になっている。これで『参院選勝利』などと口にするのは、あまりに選挙を知らないか、『おごり』以外の何物でもない」という、辛辣な発言を紹介している。

そして小林氏は、「与党の揚げ足取りと狭い自己主張では、永遠に政権交代などは果たせない。……自民党が提示できないでいるこの国の5年先、10年先の具体的『国家ビジョン』を愚直に、真摯に掲げるしかすべはないと——。それがないと、野党の政権交代の野望は永遠に『塩漬け』でおわるだろう。万年野党である。芽が出ることはない」と、「むなしい主導権争いに明け暮れる野党」にサジを投げた感あり。

野党に期待を寄せる地方紙

統一地方選と衆院補選を終え、野党にため息混じりのエールを送る地方紙の社説を紹介する。

「大阪では野党共闘にも課題を残した。共産党は先月末に比例選出の現職議員を無所属で擁立し、野党統一候補としての支援を求めたが、支援態勢は広がらなかった。首をか上げたのは立憲民主党の対応だ。衆参で野党第1会派を握っているが、共闘のまとめ役としての姿勢が見られなかった。沖縄の結果は政権との対立軸を明確にし、早くから候補を一本化して準備すれば、巨大与党にも太刀打ちできることを示した。参院選に向けた態勢構築が急がれる」（北海道新聞、4月22日付）。

「立憲民主党や国民民主党などの野党は沖縄では勝利したが、大阪では共闘を築けなかった。全国の統一地方選の結果を含めて総括すれば、野党が大きな存在感を示したとは言い難い。今回の2補選は夏の参院選の前哨戦と位置づけられた。野党の支持率が伸びない現実を踏まえれば、新潟選挙区などの1人区でどれだけ共闘できるかどうかが、参院選の結果を左右する可能性は高い。統一選と同時に行われた2補選は、与野党双方に課題を突き付けたといえる」（新潟日報、4月23日付）。

「立憲民主党など野党の存在感は希薄だった。大阪12区では共産現職が辞任して無所属で挑み与野党対決を演出したが、勝利には届かなかった。立民などの国会議員が応援に入ったが本腰を入れたとはいえない。安倍1強に対し有効な選択肢を示すのは野党の責任だが、共闘の本気度が疑わしい事態だ。参院選に向け調整できるかが問われる」（京都新聞、4月23日付）。

「大阪12区は、日本維新の新人がダブル選からの勢いそのままに自民から議席を奪った。自民は、安倍首相が最終日に公認候補の応援に入るなどの総力戦で敗れた。有権者の強い不信があったことは否定できない。長期政権のほころびが目立ち始めたものの、それに代わる選択肢が見当たらない。野党共闘は沖縄では奏功したが、大阪では存在感を示せなかった。野党各党は参院選での共闘のあり方を真剣に協議するべきだ」（神戸新聞、4月23日付）。